



普及センター

1月

インターネットでオールカラーの記事が読めるよ！

いわてアグリベンチャーネット 普及センターもりおか

検索

第188号 平成31年1月4日発行
盛岡農業改良普及センター
盛岡市内丸11-1 盛岡地区合同庁舎
TEL 019-629-6726 FAX 019-629-6739



新年のご挨拶

平成31年の年頭にあたり、謹んで新年のお慶びを申し上げます。また日頃より、農業改良普及事業の推進につきまして、多大な御理解と御協力を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、去年の気象を振り返ってみますと、4月気温は平年並みに推移、5月中旬に大雨となり、梅雨入りは平年より3日早い6月11日頃で、この時期から気温が低く推移しました。一方、7月～8月は高温で推移し、真夏日は34日を数えました。9月始めは台風21号による強風、10月始めには台風24号の大雨と強風、さらに台風25号から変わった温帯低気圧により県内の広い範囲で暴風の影響を受けました。

こうした中、作柄状況についてですが、水稻作況指数は北上川上流地域で101の「平年並み」となったほか、園芸の生産量は、一部品目によってほぼ前年並みからやや下回りましたが、高値により販売額はアップしました。また子牛価格はやや下げとはなりましたが、依然として高値状態で推移しております。このような状況に的確に対応されました農家の皆様にとりまして、ご苦勞の多い平成30年であったことと思います。農家の皆様をはじめ、関係各位の日々の努力に対しまして、心から敬意を表したいと思います。

次に管内の特徴的な動きについて申し上げますと、振興局管内8市町の新規就農者数は、毎年目標を上回る70名前後で推移しています。また、国の事業等を活用し、大規模施設園芸ハウスや大型畜舎建設による規模拡大をめざす意欲ある経営体が徐々に増加しています。圃場整備を計画している地域においては、集落営農組織化の機運が高く、また営農組織から法人化をめざし、さらに園芸導入によって収益力向上をめざす法人も出てきております。県オリジナル水稻品種である「銀河のしずく」は、順調に面積拡大され、1等米比率が99%を超え、量・品質ともに向上しております。また、近年注目されているもち性小麦「もち姫」は需要・生産が拡大しており生産者、関係機関・団体一体となった今後の取組がますます期待されております。

若者・女性の活動においては、農村青年クラブをはじめ、果樹や酪農における研究グループ、牛飼い女子グループ、食の匠グループ活動の活性化が図られているとともに、盛岡農業高校と食の匠、生活研究グループによる食の伝承・交流会が継続開催される等、今後の活躍がさらに期待されております。

経営改善の取組においては、トヨタ自動車東日本株式会社の支援・連携により、大規模ネギ農家、法人経営体がカイゼンの取組を行い、効率的な作業・労力軽減等の成果が現れ、経営力向上につながっています。

さらに、県版GAPの取組も徐々に広がり、管内において3法人と盛岡農業高校の果樹・りんごで確認登録され、今後の波及が期待されるところです。

以上、特徴的な動きを述べましたが、今年度は県の次期総合計画（平成31年度から10ヶ年）の策定年度であり、それに基づき、農業農村の持続的な発展、所得の向上等をめざした新たな4か年の普及指導計画を策定しているところです。

今後も職員一同、関係機関・団体と連携を密接に図り、普及活動を展開して参りますので、御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。結びに、皆様の益々の御健勝と御多幸を祈念いたしまして、年頭にあたっての御挨拶といたします。

盛岡農業改良普及センター所長 高橋英明

平成30年度技術実証の結果を御紹介します～畑作・花き～

畑作

大豆の収量向上支援

- 1 課題 新規大豆除草剤（商品名：アタックショット乳剤）の除草効果の確認
- 2 調査概要
 - ①アタックショット乳剤除草区（実証区）と大豆バサグラン液剤除草区（対照区）の効果や薬害を比較・検討。
 - ②大豆第4葉目抽出時期に薬剤を散布し、約10日後残草調査を実施。
- 3 調査結果概要
（調査場所：矢巾町室岡、盛岡市生出 品種：2ヶ所ともシュウリュウ）

表1 残草調査結果

試験区	残った雑草の種類
実証区（2ヶ所合計）	タデ類、エノキグサ、ホソアオゲイトウ等
対照区（2ヶ所合計）	エノキグサ、シロザ類、イヌホオズキ等

- ・アタックショット乳剤：シロザ、イヌホオズキなど、大豆バサグラン液剤では効果の劣る草種に効果が高いが、タデ類に効果が低い（表1）。
- ・大豆バサグラン液剤：タデ類に効果が高い。
⇒アタックショット乳剤は、大豆バサグラン液剤で効果の劣るシロザやイヌホオズキなどが多く発生している圃場で使用することにより、効果を発揮すると考えられる。
- ・薬害は、大豆の葉に茶褐色斑点、縮葉症状として現れた（散布後2、3日頃）。しかし、その後の新葉の展開や開花、収量に問題はなかった。

花き

カーネーションにおけるハダニ類の防除実証

- 1 課題：管内花き生産において問題となっているハダニ類対策として、天敵放飼による防除技術の実証展示
- 2 調査概要

天敵放飼：3回（5/18、7/11、8/28）、10日に1回ハダニ類頭数を調査（1葉/茎×50葉）
使用資材：スパイカルプラス 18,000円/100パック（参考価格）



（写真）スパイカルプラス放飼状況

※ハダニ類を捕食する天敵「ミヤコカブリダニ」を充填したパック製剤

※花き類・観葉植物（施設栽培）
40～120パック/10a

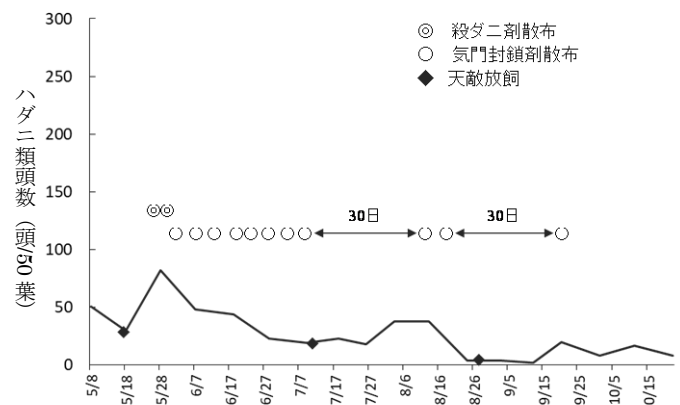


図1 ハダニ類発生消長と薬剤散布状況

- 3 調査結果概要（調査場所：矢巾町不動）

- ・天敵の放飼により、ハダニ類の発生は5/28をピークに減少した。その後、多少の増減はあるが低密度で推移した。6月以降は葉上で天敵が活発に活動する様子が継続的に確認され、天敵の定着によるハダニ類の密度低減効果が実証された。
- ・天敵が葉上にうまく定着した要因としては、アザミウマ類など他害虫の防除で、天敵に影響の少ない薬剤を用いたためと考えられた。
- ・天敵が定着した場合でも、ハダニ類を発生数0にすることはできず、気門封鎖剤の散布間隔が空くと再び増殖することが明らかとなった。